P8-2 通所リハビリテーションにおける転倒予測指標の検討 ～活動範囲別からみた身体機能と転倒の関係について～

○上田 翔平（うえだ しょうへい）[1)]，土井 浩史[1)]，貝谷 誠久[2)]
1）医療法人 清翠会 牧病院 デイケアセンター，2）医療法人 清翠会 牧病院 リハビリテーション科

Key word：転倒予防，通所リハ，評価

【目的】高齢者の転倒は、身体機能の低下や活動範囲を制限するだけでなく、生活の質そのものを悪化させてしまう。通所リハビリテーションを利用する者は、転倒予防を目的として利用されることが多い。そのために転倒を未然に防ぐための評価指標を検討する事は、これら高齢者にとって生活の質に直結する指標になると考える。

自身の先行研究で、当センター利用者を対象に、Timed Up & Go Test（以下、TUG）と Foure Square Step Test（以下、FSST）を測定し、転倒有無別にその比較を行ったが、データ数が少ない事や、転倒理由が活動範囲によるものと推測されたが、その活動範囲を十分に把握できていないことが課題として挙がった。そこで今回、活動範囲を把握する為に、E-SAS の Life Spase Assessment（以下、LSA）と、転倒自己効力感の指標であるころばない自信を用い、活動範囲別に転倒との関連を検討し、若干の知見が得られたので報告する。

【対象・方法】対象は、当センター利用者205名の内、本研究の目的・方法について十分説明を行い、同意を得た屋内外独歩または杖歩行が自立している75名（性別：男性17名、女性58名、平均年齢：79.64 ± 7.37、要介護区分：要支援1が19名、要支援2が27名、要介護1が17名、要介護2が9名、要介護3が3名）とした。

方法として、はじめにアンケート形式にて LSA を評価。その平均値を算出し、平均値以上の者を「高活動群」、それ未満の者を「低活動群」とした。更に両群に対して、口頭で過去1年間における転倒の有無を調査し、両群を転倒有無別にグループ分けを行った。運動機能の評価として、TUG、FSST、5m 速歩を、転倒自己効力感を「ころばない自信」にて評価し、これらの項目を両群の転倒有無別に比較検討した。

統計方法は、Mann-Whitney の U 検定もしくは対応のない T 検定を用い、有意水準は $p < 0.05$ とした。

【説明と同意】本研究は当病院倫理委員会の承認を得た。また、対象者には発表の趣旨を説明し、同意を得た。

【結果】LSA の平均得点は67.54 ± 27.66だった。これを基準にグループ別けを行うと、「高活動群」は34名（平均年齢：78.54 ± 7.39）であり、そのうち転倒経験者は10名（29%）であった。「低活動群」は41名（平均年齢：80.22 ± 7.37）で、そのうち転倒経験者は26名（63%）であった。「高活動群」の転倒有無別の比較では、各項目において有意差は認められなかった。

「低活動群」の転倒有無別の比較では FSST にて有意差を認めた（$p < 0.05$）。

【考察】本研究において、LSA の平均値は67.54であり、通院・通所リハを対象とした LSA の先行研究と類似した結果となった。また活動範囲別における転倒人数の割合も、低活動群において多い傾向にあり、こちらも先行研究と類似した結果となった。

活動範囲別転倒有無別の比較では、「高活動群」において各評価項目に有意差は認められなかった。この理由として、「高活動群」は運動機能が比較的高く、内的要因による転倒のリスクは低いが、活動範囲の拡大による様々な環境因子が多くなるため、各評価項目や LSA のみの評価では転倒の指標としては不十分であったと推察される。

「低活動群」においては FSST のみ有意差が認められた。この理由として、「低活動群」は、活動範囲が家屋内、もしくは庭先までの範囲でしかなく、環境因子による転倒リスクにさらされにくいこと、また FSST という検査の特性上、前後左右方向へのステップ動作を測定するため、比較的高い運動機能が要求される。そのため FSST において時間を要する者は転倒に対する回避能力が低いため転倒の予測指標として抽出されたと推察される。

今後は、「高活動群」において、より詳細に活動範囲や反応速度等の身体機能の評価を行うことによって転倒との関連を検討する事、「低活動群」において、FSST の結果に関わる身体機能の評価を行い、転倒予防に努めていきたい。

【理学療法研究としての意義】本研究において、活動範囲別に転倒の予測指標の検討を行った。高活動群においてその指標は抽出できなかったが、低活動群において傾向を見出せたことは理学療法的に意義のあるものと考える。